ごあいさつ

田中　克
たなか・まさる
京都大学フィールド科学教育研究センター　前センター長

京都大学フィールド科学教育研究センター（フィールド研）が主催致します時計台対話集会も今年で三年目を迎えました。その基調はフィールド研の理念であり、目標ともしています〝森里海連環学〟に置きながら、毎年異なった角度からこの新しい学問の深化と普及に努めて参りました。今年度は、「森里海連環学が、日本の木文化を再生する」をテーマに、対談、講演、パネル討論、フロアーとの対話を柱に構成致しました。

最初の対談は、「21世紀の人間と〝森里海連環学〟」について村田泰隆（株）村田製作所代表取締役社長と尾池和夫京都大学総長の御二人に縦横に思いを語っていただきました。引き続く講演では、竹内典之京大フィールド研教授が「日本の森林は今」を、山田壽夫九州森林管理局長が「林野庁から始める林業再生」を話題提供していただきました。これらの対談や講演を通じて、あり余った森林資源、ほと

んど手入れされずに放置され続ける広大な人工林という現実にどのように対処し、山元が元気になれるかの林業再生への可能性が指摘されました。このことを受けて、パネル討論では、各々独自のアイデアとフィールドで木の利活用に大活躍されている四名のパネラーの皆さんの実践に根ざした多様な話を進行役のアウトドアライター（作家）の天野礼子氏が整理しながら、白熱した討論が行われました。

〝森里海連環学〟はわが国の国土環境に根ざした森と川と海のつながりの再生を、都市を含む里の知恵によって再生しようという新しい統合学問領域です。水を介した森と川と海のつながりの再生を展望する時、まず手をつけるべきは、手入れされずに放置された人工林の広域的な間伐を進め、それによって人工林生態系の変化、河川や河口域の環境や生物に及ぼす影響ならびに大量間伐材の有効利活用という壮大な〝フィールド実験〟のモデル的展開が想起されます。この時計台対話集会は、そのことを実現する上で、多くの示唆に富むものとなりました。御参加いただきました皆様ならびに諸準備に尽力された皆様方に厚く御礼申し上げます。特に、昨年より引き続き、時計台対話集会の開催とその報告冊子の出版を御支援いただいています（株）村田製作所に心より御礼申し上げます。